

染織に取り組む現代の女性達と民芸運動との 関わり方

—兵庫県青垣町佐治地域における丹波布の事例から

小野 絢子

総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻

要 旨

丹波布とは、現在の兵庫県丹波市青垣町周辺で織られている縞模様の木綿布である。丹波布の特色は、手紡ぎ手織りで織られ、産地周辺の植物染料を用いて糸染めし、緯糸につまみ糸と呼ばれる絹の屑糸を用いる点にある。模様は格子模様で、色は周辺の植物染料と藍染を用いる為、青や茶、黄、緑を主体としている。

地元で「縞貫」や「佐治木綿」と呼ばれていたこの布を、美的な価値観から評価し「丹波布」と名付けて支援したのは民芸運動の創始者である柳宗悦である。ただし柳が「丹波布」と呼んで評価したのは、「縞貫」や「佐治木綿」と呼ばれる様々な木綿布の全てではなく、ある一定のパターンを踏まえた一部の木綿布であった。

柳の評価と民芸運動からの働きかけにより、当時衰退の途にあった丹波布は1954（昭和28）年に復興を果たし、現在にも継承されている。復興した丹波布の担い手となったのは「技術者」と呼ばれている女性達である。彼女達は、「丹波布伝承館」で技術指導を受け、卒業後は技術者として丹波布を織り継いでいる。現在、「丹波布伝承館」を卒業した技術者は多くが女性である。同時に、産地では丹波布は農閑期に女性達が織っていたと語られていることから、丹波布の生産は女性の仕事として強く連想されてきた。

これまでの研究では、民芸運動が普及対象として女性に注目しており、女性側がどのように応えたかについて、岡山県倉敷市で聞き取り調査を行い検討した。岡山県倉敷市の事例と青垣町佐治地域の事例は、担い手が女性である点、その女性達が染織に携わっている点などの類似点を挙げられることから、両者の比較を通して佐治地域の事例の特色を検討する。

本稿では、佐治地域での事例を通して、民俗学の分野から女性による染織という活動の社会的位置づけを、ジェンダーの視点を交えて検討する。そのために、まずは民芸運動の働きかけによって「丹波布」が生み出され、復興および継承運動が展開する過程を整理する。次に、現在の丹波布の担い手である「技術者」の現状について、聞き取り調査を元に分析する。これらの調査結果を踏まえて、染織という活動がどのように女性性と接続しているのかを分析し、現代における染織に取り組む女性の働き方やその意義を明らかにする。

キーワード：丹波布、民芸運動、柳宗悦、工芸、女性、染織

The Relationship between Contemporary Women Engaged in Textile Production and the Mingei Movement:

The Case of Tamba Textiles in the Saji Area of Aogaki Town, Hyogo Prefecture

ONO Junko

Department of Japanese Studies,
School of Cultural and Social Studies,
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

Summary

Tamba textile is a striped cotton fabric woven in and around Aogaki Town in Tamba City, Hyogo Prefecture. It is a hand-spun and hand-woven textile using locally sourced plant dyes for yarn dyeing and incorporates silk waste yarn, called *tsumami ito*, in the weft. The fabric has a grid pattern, and the colors are primarily blue, brown, yellow, and green, sourced from local plant dyes and indigo dyeing.

Yanagi Muneyoshi, the founder of the *Mingei* Movement or folk craft movement, recognized the fabric's aesthetic value. Locally known as Shimanuki or Saji textile, Yanagi named it Tamba textile and supported its preservation. However, the textile which was praised and designated as Tamba textile by Yanagi did not apply to all cotton fabrics called Shimanuki or Saji textile, but rather to certain cotton fabrics that adhered to a defined pattern.

Thanks to Yanagi's appraisal and the efforts of the *Mingei* Movement, the Tamba textile, which was in decline at the time, was revived in 1954 and continues to be passed down until today. The women who became the bearers of this revived Tamba textile are now referred to as Tamba textile weavers. They received technical instruction at the Tamba textile Center and have continued weaving Tamba textiles as technicians after completing the Center course. It is known that Tamba textile was woven by women in the producing regions during the off-season, which led to the strong association of Tamba textile production as women's work.

Previous research has examined how women responded to the *Mingei* Movement as its target audience based on interviews conducted in Kurashiki City, Okayama Prefecture. The Kurashiki City and Saji region cases are similar in that the primary practitioners were women engaged in dyeing and weaving. Therefore, by comparing the two cases, distinctive features of the Saji region case were examined.

This paper addresses the social positioning of women's dyeing and weaving activities from a folklore studies perspective and incorporates a gender perspective, referring to the Saji region case.

First, we outline the process by which the *Mingei* Movement spurred the creation of Tamba textile and subsequently led to its revival and preservation efforts. Next, we focus on the Tamba textile practitioners. Currently, those involved in Tamba textile production are called Tamba textile weavers. Based on these research findings, we analyze how textile activities connect with women, clarifying the working styles and significance of women engaged in textile in modern time.

Key words: Tamba textile, *Mingei* movement, Yanagi Muneyoshi, crafts, women, dyeing

はじめに

1. 民芸運動と丹波布に関する先行研究
2. 丹波布の発見と復興の足跡
 - 2-1. 丹波布の概要
 - 2-2. 丹波布の発見と復興の経緯
 - 2-2-1. 柳による発見
 - 2-2-2. 丹波布復興運動のはじまり
 - 2-2-3. 復興から継承へ—男性指導者から女性技術者へと変化する担い手
3. 丹波布の担い手
 - 3-1. 丹波布の担い手から指導者へ—足立康

子の事例から

- 3-2. 丹波布を織る女性—技術者A氏の事例から
4. 佐知地域における女性の染織という営み—岡山県倉敷市の事例との比較から
 - 4-1. 岡山県倉敷市の事例—倉敷本染手織研究所について
 - 4-2. 民芸運動と女性達の関係性—岡山県倉敷市と青垣町佐治地域との比較から
 - 4-3. 現代における女性と染織の向き合い方

おわりに

はじめに

丹波布とは、現在の兵庫県丹波市青垣町佐治周辺で織られてきた縞模様の木綿布である。丹波布の特色は、手紡ぎ手織りで織られ、産地周辺の植物染料を用いて糸染めし、緯糸につまみ糸と呼ばれる絹の屑糸を用いる点にある。模様は格子模様で、色は周辺の植物染料と藍染を用いる為、青や茶、黄、緑を主体としている。これらの木綿布は、地元で元々「縞貫」や「佐治木綿」と呼ばれており、布団地や丹前などに利用されていた。江戸時代以降、吸水性と保温性に優れ安価であった木綿は、瞬く間に庶民の間に広まり衣料品として全国的に活用された。兵庫県でも木綿の栽培が盛んに行われ、丹波布以外に様々な木綿布が織られていた。

民芸運動¹⁾の創始者である柳宗悦は、こうした兵庫県下で織られる様々な木綿布のうち、ある一定のパターンの布を「丹波布」と名付けて評価した。これをきっかけにして、当時衰退の途にあった丹波布は1954（昭和28）年に復興を果たし、現在でも生産されている。復興後の丹波布の担い手となったのは現在「技術者」と呼ばれている女性達である。彼女達は、「丹波布伝承館」で技術指導を受け、卒業後は技術者として丹波布を織り継いでいる。

民芸運動は民芸品の蒐集・展示のみならず多岐にわたる活動を行っていくが、そのうちの一つに産地の支援を挙げることができる。柳ら民芸運動のメンバーは、全国の産地に赴き生産者達と交流し、製品へのアドバイス等を行った。これらの活動は常に民芸の理念や思想と一体になっており、運動の普及活動としての側面も併せ持っていた。丹波布の発見と評価もこのような活動の一つだが、他と異なるのは、現地には元々「丹波布」という名称の品物は存在せず、これを柳が自身で創造したところにある。

また、民芸運動は活動の目標に「美の生活化」を掲げていた。これは、民芸品を生活の中で使ったり、民芸の理念に即したライフスタイルを提案することによって、人々の生活をより美しく豊かに変革することを目標としていた。この時、効果的な普及先として眼差されたのは女性だった。特に、家庭で家事を担う主婦をターゲットにして、いかに女性に対して民芸運動を広めるかという議論がしばしば展開された²⁾。

筆者はこれまでの研究で、民芸運動がどのように女性に対してアプローチを行い、女性側がどのようにそれに応えたかについて岡山県倉敷市で聞き取り調査を行い分析してきた。倉敷市の事例では、民芸の思想と染織の技術を一体と

して、女性を対象に運動が展開したことが明らかになった（小野 2012）。民芸運動からの働きかけを受けた女性達は、染織の技術を身に着けると共に、民芸の理念を自身の生活や人生観の中にポジティブに取り入れていた。岡山県倉敷市の事例と兵庫県青垣町佐治地域の事例は、担い手が女性である点、その女性達が染織に携わっている点などの類似点を挙げられる。したがって両者の比較検討から、民芸運動と女性との関係性や、佐治地域の事例の特色が浮き彫りになると考えている。民芸運動は女性に対しての働きかけを行ってきたが、それについての分析や実態の調査は十分ではない。本研究は、民芸運動の実践の様子と、民芸運動と女性の間についても明らかにするものである。

考察に際して本稿では、佐治地域を事例として、女性による染織という活動の社会的位置づけを、民俗学分野からジェンダーの視点を交えて検討する。民俗学では柳田國男以来、早い段階から女性にまつわるテーマが取り上げられ、女性研究者による研究も進められてきた。倉石あつ子による『女性民俗誌論』によって、女性と家庭、労働についても分析されてきたが、一方で、こうした研究は家庭の中での女性の役割を検証しつつも、社会的な位置づけは十分に検討されてこなかった（倉石 1995）。したがって、ジェンダーの視点を取り入れた研究の重要性が指摘されてきた（八木 2007）。

また、女性による染織や手工芸を分析する際は、山崎明子の研究を主に参照する。山崎は近年の研究の中で、男性主体であった伝統的手工芸の世界に、女性が参入している状況について、本来は女性も関わっていたがその存在は可視化されず、また業界が不安定化しているからこそ、女性の参入が賛美されていると指摘している（山崎 2023: 221）。

本稿では、丹波布を織る女性達の染織への取り組み方、そして民芸運動との関係性を分析する。そのために、まずは民芸運動の働きかけに

よって「丹波布」が創造され、復興および継承運動が展開する過程を、聞き取り調査によって得た情報を交えて整理する。次章で述べる通り、これまで丹波布の歴史について、現地の聞き取りを含めて整理した研究は多くない。したがって、時系列の整理のみならず、産地で起きた出来事をより立体的に描き出せると考える。

これを踏まえて、「技術者」と呼ばれる丹波布の製作に携わる女性達に聞き取り調査を行い、その取り組みや産地の現状を整理する。本事例は、先述した山崎の指摘が概ね該当しつつも、一方でその研究が主な対象としている「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」に基づいて指定される「伝統的工芸品」の現場とは異なる状況がある。丹波布は、1993（平成5）年に兵庫県の「県指定伝統的工芸品」に指定されているが、国による「伝統的工芸品」ではない。このため、世間への認知度や活動の規模も異なっている。さらに、山崎の分析は、男性中心の業界に女性が参入する事例を主な対象にしているが、丹波布の場合は、柳の評価を受ける以前から生産の主体は女性であった。産地では主婦達による農閑期の家内産業であったと語られており、現在でも丹波布の生産は女性の仕事として強くイメージされている。

つまり、丹波布とは、国指定の「伝統的工芸品」ではないが地域と深く結びつき、伝統的なものとして認知され、かつ元々女性によって生産されていた手工芸品である。したがって、本事例に注目することで、手工芸とジェンダーをめぐる問題に新しい視座を加えることができると考えている。これらの先行研究と現地での調査を踏まえて、現代において染織という活動がどのように女性性と接続しているのかを分析し、染織に取り組む女性の働き方やその意義を明らかにする。

1. 民芸運動と丹波布に関する先行研究

丹波布に関する先行研究として代表的なもの

は、曾和英子による「丹波布技術伝承における地域資源活用」(曾和 2018)が挙げられる。曾和の研究では、丹波布復興の経緯を概括した上で、丹波布を製法や素材から調査し、その特徴をまとめている。さらに、「丹波布の美学及びその技術伝承」(趙(曾和) 2018)では、丹波布の縞模様の美的な評価に民芸運動の思想が影響しており、現在の生産においてもその評価軸が重視されていることが述べられている。上記の論文は、民芸運動と丹波布との関係性や、技術者達の現状を検討するうえでも重要な研究であると言える。

さらに、『丹波布に魅せられた人』(吉田 2012)と『丹波布復興の父 金子貫道』(滝川 2017)も参照し、丹波布復興の歩みをまとめていく。前者は、丹波布復興のリーダーとなった足立康子本人に聞き取りを行い、丹波布が復興に至るまでの経緯を足立の足跡と共に紹介した書籍である。後者は、復興運動の初期を牽引した金子の活動を紹介したものである。また、金子は丹波布の復興及び継承運動の最初期のメンバーでありながら、製作の方向性について他メンバーと意見が対立し、袂を分かち形で離脱したとされている人物である。その他にも丹波布をめぐる様々な人間関係が生じていたと考えられることから、こうした先行研究および資料と共に当事者の視点を踏まえて、丹波布復興の歴史を整理する。

民芸運動に関する先行研究として、運動が産地に与えた影響について分析した濱田琢司による『民芸運動と地域文化—民陶産地の文化地理学』(濱田 2006)を参照する。濱田は、陶磁器の産地を事例として民芸運動と地域との関わりに焦点を当てて論じており、本研究の関心に最も近いものと考えられる。その他にも、小島邦江の「柳宗悦と倉敷一大原孫三郎との出会いを中心に—」(小島 2005)では、柳ら民芸運動の同人達の地域への介入の足跡と、受容側となった倉敷市でどのような民芸運動が展開したかを

時系列で整理している。これらの研究では、柳らが地方に対して運動を展開する際には、多くの場合、濱田庄司や河井寛次郎、芹沢銈介といった作家達と共に現地へ赴き、技術指導という形で関与していることが分かる。同時に、柳ら民芸運動と地方の間には、指導する側と指導される側という力関係が発生していることが指摘されている。本研究での調査を振り返ると、丹波布の産地に民芸運動が介入する際に同様の手法が用いられていることが分かったが、作られる製品が染織品であり、また実践者が子育てや家事労働を同時に行う女性達であることから、これまでの研究とは異なる事例であると言える。併せて、民芸運動の研究史において、これまで女性との関わりについて言及した研究は十分ではない。したがって、民芸運動をジェンダーの視点から分析するという点においても、本研究は新しい視座を提供できるものと考えている。

2. 丹波布の発見と復興の足跡

本章では丹波布の概要と共に、発見から現在に至るまでの足跡についてまとめる。また、柳により丹波布が発見されてからの経緯は、『年表資料 丹波布復興』³⁾を元に、後述する丹波布復興および継承運動の中心人物であった臼井芳郎の息女にあたる八木甫瑛子(旧姓:臼井)氏への聞き取り調査で得た情報を加えて記述する。なお、聞き取り調査については2020(令和2)年から現在まで、主に対面で行っている。

2-1. 丹波布の概要

丹波布とは、丹波国氷上郡佐治村(現在の兵庫県丹波市青垣町佐治周辺)で織られている手紡ぎ手織りの木綿布である(写真1)。佐治村周辺では日常用から商用まで幅広い用途で平織りの木綿布が織られており、総じて「佐治木綿」や「縞貫」等と呼ばれていた。名称に縞と入る通り、模様は縞か格子が多く、染色は藍染の他に周辺で自生する植物を用いて行う⁴⁾。その為、

色のバリエーションは青や茶の濃淡、黄、緑が大半を占める。こうした木綿布のうち、緯糸に絹の屑糸（「つまみ糸」と呼称）を入れて織られた布は、主に商品として京阪神の市場で販売されていた。佐治地域では、綿を育てて自家用の衣服や布団地などを織っていたが、やがて農家の主婦の副業として定着していく。17世紀には品質も安定し、木綿布の出荷量が増えていった（上村：1964）。基本的には農閑期の女性達の仕事であったと言われている。製作が始まった年代は定かではないが、江戸時代に入ると綿花の栽培が全国に広がり庶民の衣料品として普及することから、「寛政（1789-1801）または文政期（1818-1831）から明治25年（1892）年頃までに、京都・大阪に商品として出荷されていた」と考えられる（曾和 2018: 1378）。

八木氏によれば佐治周辺では昔から養蚕も行われていたとのことで、つまみ糸用の屑繭を入手することは容易であったという。藍染めを行う紺屋も複数件あったそうだが、今から5、60年ほど前に最後の一件が廃業したとのことだ。丹波布自体も、柳が出会った当時は既に衰退しつつあり、産地が判明する頃には殆ど廃れていた。1924（大正13）年に柳はこの布を京都の朝市で見出したが、産地等が不明であったことから、染織研究家の上村六郎⁵⁾に調査を依頼した。上村の尽力により、1931（昭和6）年には産地が特定される。戦争を挟んで1954（昭和29）年に地域の有志により復興を果たし、翌1957（昭和32）年に「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財（選択無形文化財）」に選択された際には、「丹波布技術保存会」により丹波布の条件として「丹波布四原則」が次の通り定められた。

「丹波布四原則」は①手紡ぎで糸を作ること、②手織りで織られること、③天然染料で染色を行う事、④緯糸に絹の「つまみ糸」を使用することの四項目が挙げられる。この項目が「丹波布」を規定しているが、上村は最初に発表した論考の中で、丹波布が柳の目によって選ばれたある

一部を指すことを次の通り明記している。

ここに私共が丹波布と云っているものは、もちろん丹波の地方で出来たものではあるが、そのうちのある特殊の感じを持っているもののことであって、単に丹波で染織された布と云う広い範囲のもののことではない。京都辺で一般に佐治木綿と呼ばれたもののことである。（上村 1931: 3）

この記述から、柳の審美眼を元にした一部の木綿布を「丹波布」と呼び、新しくカテゴライズしたことについて民芸運動側、少なくとも指導者として関わっていた上村は自覚的であったことが読み取れる。

2-2. 丹波布の発見と復興の経緯

2-2-1. 柳による発見

先述の通り、柳が丹波布と出会ったのは1924年のことだった。前年に起こった関東大震災の影響で東京を離れて京都に引っ越していた柳は、京都の朝市でこれを発見した。市の主人はこれを「丹波」と呼ぶのみで、はっきりとした産地が分からなかった（柳 1956）。そこで柳はこの布を仮に「丹波布」と呼び⁶⁾、上村に産地や製法などの調査を依頼した。また、柳は同時期に染織家の青田五良（1898-1935）にも調査の依頼をしていたが、直接産地と関わることは無かったようだ⁷⁾。

この当時上村は大阪学芸大学（現在の大阪教育大学）にて教鞭を執っており、上村の研究室の学生であった八木氏が偶然にも佐治村の隣村である幸世村出身であることが判明する。上村は既に産地の大まかな目星をつけていたようで、相談を受けた八木氏は佐治までの案内役を務めることになった。そして、1931（昭和6）年に上村が佐治村を訪ね、これによって佐治周辺が産地であると判明する。柳は民芸運動の機関紙である『工藝』6号⁸⁾に丹波布の特集を組み、「丹

波布の美」(柳 2011 (1931))と題した論考を掲載した。これは、初めて丹波布について柳が記した論考にあたり、「丹波布」という名称もこの時から用いるようになる。柳は「丹波布の美」において、次のようにその特徴を記している。「山に生える二三の植物、単純な機具、縦横の縞、簡易な織り方、村の女達。こんな無造作な世界で、此静な渋い布が育つのである」(柳 2011 (1931) : 121)として、さらにこうした布が出来上がる背景には、染料などの材料や織る為の道具、または織り方も従来の方法を守っているためであるとして、この製作方法や姿勢を布と同等に賞賛している(柳 2011 (1931))。

上村もまた同号に「丹波布のあとを尋ねて」(上村 1931)として、丹波布との出会いから、製作技法、布として特色を解説している。その後、これ以上の丹波布の調査は第二次世界大戦の影響で一旦休止となる。

2-2-2. 丹波布復興運動のはじまり

次に動き出すのは終戦から暫く経った1954(昭和29)年1月、上村が改めて佐治村を訪れた時のことだった。この訪問では会合がもたれ、次に述べる通り佐治村の有力者が多数参加した。したがって、この会合が産地と民芸運動との初めての本格的な出会いであると同時に、丹波布の復興運動の母体である「丹波布復興協会」結成の契機となった。

また、この会合での民芸運動側からの参加者は、これまで上村以外のメンバーについて不明瞭であったが、三宅忠一⁹⁾と林弥衛¹⁰⁾も同席していたと考えられる(三宅 1957)。また、上村の協力者として篠田統¹¹⁾も同行していた。後に、製作上の指導については上村が担当し、織り上がった布の販売は三宅が担うことになったという。

一方、地元の有志として集まったのは金子貫道(大燈寺住職)、田村徳治(医師)、臼井芳郎(郷土史家、八木氏実父)、足立たか(綿屋)と案内

役の八木氏だった。会合は足立たか宅で行われたが、この時たかの夫である足立陸太郎は既に逝去していた。したがって、たかと陸太郎の息子である欣一郎が当主だったが、足立家から会合に参加したのは足立たかのみだったと考えられる(吉田 2012)。会合に足立家が選ばれた理由について八木氏によれば、1935(昭和10)年頃に足立陸太郎が丹波布の復興を試みていたことが関係しているという。陸太郎は、1931(昭和6)年から創刊した『工藝』を購読しており、丹波布の特集号となった『工藝』6号を蔵書していた。したがって、柳の「丹波布の美」等を読んで触発されていたと推測できる。しかし、計画は「友人と商人が加わって始まったが、その内の一人が黙って紡績糸を使った偽物を作り売りさばいたため問屋から返品され」(吉田 2012)、結局失敗に終わったという。

先述の会合から2か月経った1954年3月には「丹波布復興協会」が結成され、事務局は金子が住職を務める大燈寺に置かれた。1月の会合のメンバーに、足立清太郎(農業、村会議員、画家)、生田克己(元兵庫県会議長、元中兵庫信用金庫理事長)、芦田健蔵(医師)、中沢正(元幸世村村長、歌人、漢学者)、安田直熙(元幸世村村長)が加わり、会長は金子貫道が務めることとなった。彼らは幹部に就任すると共に、それぞれ二万円ずつ出資し、さらに農協から借入れを行い活動資金を用意した(吉田 2012: 78)。

製作に関しては、足立たか、足立欣一郎の妻であった足立康子(たかから見れば義理の娘)、親戚の芦田良子¹²⁾、金子貫道の妻である金子三八子、谷こうをはじめとした近隣で丹波布の織り方を覚えていた年配の女性達が協力したという。道具も地域に残っているものを集め、それを直し使用した(吉田 2012)。また、同年3月には大燈寺にて上村による植物染料の講習会が開かれた(吉田 2012: 64)。

そして同年4月、復興第一号を地元の織り手であった谷こうが織りあげる。この時の柄は「一

号柄」と呼ばれて現在も織り継がれている。以降は、足立たかを中心に康子、良子らがサポートする形で丹波布が織られ始め、やがてメンバーの高齢化に伴って活動の中心的役割を康子が担っていくこととなる。製作にあたって手本としたのは、民芸運動が蒐集した丹波布や、先述した「丹波布の美」(柳 1931)における柳の記述である。これを参考に、柄や色、糸の太さについて試行錯誤され、民芸運動の提示する美意識に適っているかどうか注視された。

復興第一号が織られ、足立たかからによって二号、三号と続く製作が始まり、丹波布の復興そのものは軌道に乗り始めたことと判断されたことで、1955(昭和30)年に「丹波布復興協会」は一度解散し、「丹波布技術保存会」として新発足した。メンバーは変わらず、会長は金子が継続した。同年には、三宅が館長を務める日本工芸館にて、「丹波布復興展示会」¹³⁾が開催された。三宅によると、この会には柳も訪れて座談会を行ったという(三宅 1957)。また、同じ年の『日本の工芸』¹⁴⁾第13号には丹波布の近況報告として「丹波布技術保存協会ではかねて計画中の広巾織機が入手でき、近く広巾の丹波布が織りだされることになった。これは座布団、イス張りに好適であるから、海外からの注文に期待できると臼井理事から近況報告があった」(三宅 1956: 3)と語られている。通常の織物より広い幅で布が織れることから従来の着物や帯以外にも、クッションカバーや座布団が製作でき、国内だけではなく海外へ販路を拡大することも期待されていたようだ。この広巾の織機の入手については、民芸運動同人であり染織家の外村吉之介からの紹介があり、八木氏によれば上村、臼井、金子で倉敷を訪ねたという。ただし、既に周辺から古い織機を集めた直後だった為か資金面で協会の一部メンバーからは反対も起こったという。最終的には、広巾の織機はこの後の1958(昭和33)年までには導入されたようだ。現在、青垣町周辺に織機の実物は残っていない

そうだが、日本工芸館の収蔵品に広巾の丹波布を見ることが出来た(写真2、3)。また、現在足立家に残る足立康子が使用していた織機は、岡山県倉敷市の木製品工房である竹泉堂の織機だと考えられる。竹泉堂は、外村が機を購入していた工房であり、外村のリクエストにより織機の上部の部品の一部に模様が施されている。足立康子の機には、この模様が見られるのである。こうした繋がりからも、外村が織機や機道具の準備に協力していたことは想像できる。

また、陶芸家の河井寛次郎と共に柳が、初めて佐治村を訪れたのも同じ1956年であるが、これ以降の柳の訪問は確認されていない。したがって、丹波布と名前を付け、その枠組みを作ったのは柳であったが、産地を訪れたのはこの一度であり実際の活動にはほとんど関与していないと言える。

産地での指導や支援を行ったのは上村と三宅であった。上村は、当時の協会のメンバーから染色についての指導を頼まれたため、金子と金子三八子にそれを行い(上村 1988)、先述の通り大燈寺で講習会を開くなどしている。また、『丹波布編帳』として、復興後の丹波布の見本裂を掲載した書籍を発行していることから、産地との繋がりや上村自身が関心を持って接していた様子をうかがうことができる。三宅は日本工芸館にて「丹波布復興展示会」を開催し、復興後の丹波布を複数点収蔵している。また、「兵庫の民芸 丹波布の復興」では「大燈寺(原文ママ)に集合した地方の有志を激励し、順序としてまず丹波布復興協会の設立を進言し、技術指導は上村教授、普及面は私が担当する約束をした」(三宅 1956: 6)など、積極的に復興運動に関与しようとした姿勢が見られる。上村、三宅は共に関西を拠点としていた為に産地とは物理的に距離が近く、民芸運動側での実働を担っていたと考えられる。

2-2-3. 復興から継承へ—男性指導者から女性技術者へと変化する担い手

産地の努力と上村、三宅らの支援によって復興を果たした丹波布は、先述の通り、1957（昭和32）年3月30日に、「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財（選択無形文化財）」に選択された¹⁵⁾。この時、調査に訪れた染織研究家の山辺知行（1906–2004）は、地域の植物で染め、手紡ぎ手織りによるといった従来の製法を守っている点を高く評価したという（吉田 2012: 144）。山辺からのこうした評価もあり、以降は製作における工程や材料はますます厳重に守られるようになる。先述した「丹波布四原則」は、柳と上村の言説をベースにしてこの頃に大枠が定められたものと考えられる。

しかし、一方で人手不足や製作の手間、販売価格が問題として浮上した。こうした状況を改善するため、会長の金子は紡績糸や化学染料の使用を提案したが、同会のメンバーから拒否されたことから、1959（昭和34）年に「丹波布技術保存会」を離脱する（吉田 2012: 82）。交代で会長職に就いたのは田中徳治であった。八木氏によれば金子から材料および工程の簡略化の提案があり、これを受けて「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」が取り消しになりかけるという事件が発生した。同様のエピソードは、八木氏の語りの他にも『丹波布に魅せられた人』（吉田 2012）でも記載があり、後述する現在の技術者達にも教訓として周知されている出来事である。本件について、当時の技術保存会では議論が繰り返され、柳、上村、臼井らが対応に当たったという。併せて、1961（昭和36）年の『日本の工芸』第71号には金子が脱会した際の報告が掲載している。そこには、「辞任の理由は明らかでないが、数年前より氏が考案した新丹波布が、文化財指定の丹波布と類似していることで信用上困るという声が高まり、名称変更を迫ったことがある。（中略）こうしたことで数年間トラブルが絶えず安田理事（協団丹波協会長）が

度々調停に乗り出し一応解決を見るに至ったが、これも真の妥協ならず、今回突然、脱会を通告したものである」（三宅 1961）と述べられている。なお、『丹波布復興の父 金子貫道』（滝川 2017）は、金子の子息からの聞き取りと金子の思想を元に、金子からの紡績糸や化学染料の使用の提案が事実かどうかは定かではなく、その脱会は不当なものであったと分析している。

本稿では、三宅と吉田の記載と八木氏の語りを踏まえて、具体的な内容は定かではないが、金子から丹波布に対する新しい製法や材料などの提言があり、実際に「新丹波布」と呼称されるような類似の製品が織られていたと推測する。ただし、こうした金子の提案の理由には、全工程を手作業でしている為に、生産数にも限りがあり、これによって益々値段が上がることや、織り手の負担を軽減しつつ、いかに丹波布を広く紹介していくか等の問題意識があったと考えられる。価格や材料をめぐる課題は現在にも続くものであることから、化学染料や紡績糸などを用いた生産に関する提案は、必ずどこかのタイミングで検討されるべきものである。こうした意味で、化学染料や紡績糸の提案自体は丹波布の将来を考えるうえで、必ず誰かが口火を切るべき重要な提言であり、仮にそれを金子がしていたとすれば、将来を俯瞰した視点は評価すべきものであると考える。

この出来事は、運動の始動当初からのリーダーであった金子が離脱することで収束するが、一方で文化財保護法に対する誤解が生じていた可能性が考えられる。丹波布が選定を受けた「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財（選択無形文化財）」は、文化財保護法が昭和29（1954）年に改訂された時に追加された制度である。当時の条文では「文化財保護法第56条の9」として、「委員会は、重要無形文化財以外の無形文化財のうち特に必要のあるものを選択して、自らその記録を作成し、保存し、若しくは公開し、又は適当な者に対し、当該無形文化財の公開若しく

はその記録の作成、保存若しくは公開に要する経費の一部を補助することができる。」と記されている。

産地において丹波布は、「無形文化財の指定を受けた」¹⁶⁾として語られるが、実際には国によって記録の作成、保存、公開が行われるのみで、重要無形文化財や登録無形文化財などとは扱いが異なる。また、現在の文化財保護法では、「第76条の16」において重要無形文化財や登録無形文化財の認定の取り消しについて記載があるが、丹波布が該当する「重要無形文化財及び登録無形文化財以外の無形文化財」の場合は、取り消しについての条文は存在しない。新設された制度であるため、こうした誤解が生じたことも想像に難くない。また、三宅の記述の中に「兵庫県民芸協会の応援によって無形文化財の認可を申請中」(三宅 1957: 7)とあることから、元々は当時の「文化財保護法」の「第56条の3」に記載される重要無形文化財への指定を目指していたのではないかと考えられる。

さらに、金子が離脱した1959年にはもう一つ大きな出来事があった。それは、三宅忠一が民芸運動の進め方¹⁷⁾をめぐって柳と意見が対立し、最終的に柳の創設した「日本民藝協会」¹⁸⁾を脱会したことである。三宅は、同1959年6月26日に新しく「日本民芸協団」を設立し、大阪を拠点に独自の活動を展開した。この時、翌1960年に丹波布復興運動のメンバーが中心になって、日本民芸協団の支部として「丹波協会」¹⁹⁾が結成された。つまり、初期メンバーには民芸運動に参加するという意思があり、その参加先は柳ではなく三宅による活動であった。

しかし、先述の通り間もなく金子が丹波布の丹波布技術保存会を離れ、以降は新しいメンバーが参入することはなく、次第に織り手を含めた関係者の高齢化が問題視されるようになる。没年が分かっているメンバーに関しては、医師の田村徳治は1967(昭和42)年に、義母の足立たかは1978(昭和53)年に82歳で、三宅忠一も

1980(昭和55)年に、臼井芳郎は1985(昭和60)年に亡くなっている。吉田による『丹波布に魅せられた人』の中で、足立が「丹波布技術保存会は私一人になってしまった」(吉田 2012: 149)と漏らしていたことを記述している通り、昭和50年代から60年代かけて最初期のメンバーが次々にこの世を去って以降は、足立康子がほぼ一人で会を支えていたと考えられる。実際に、1979(昭和54)年には、足立康子が丹波布技術保存会の会長に就任する。したがって、年齢的な問題で初期の男性メンバーが活動を離れるのに併せて、足立が活動の中心的役割を担うようになる。

足立が主体となって以降、継承運動の関係者にはますます女性の技術者が増え始める。翻って、男性の参加が減少すると言ってもよいだろう。会長となって以降も、足立の主な活動は製作であり、次いで「丹波布伝承館」での講師をはじめとした技術指導であった。彼女が講師となる教室や伝承館には、受講生として地元の女性達が参加していった。そして、次に述べるような後継者養成プログラムが順調に継続し、技術者の育成が軌道に乗ることによって、次第に女性の技術者達へ活動の主導権が移行していったと言える。

それでは、ここからは具体的にどのようなプログラムが行われたのかを紹介する。まず最初に行われたのは、1974(昭和49)年に地域の主婦達を対象として「後継者養成講座」である。この企画には十分な参加者が集まり、後に「丹波布伝承館」が開館した際には足立康子の後を受け継いで講師となった者達もいた。

1984(昭和59)年には青垣町公民館が主催し「丹波布技術伝承教室」(資料1)が開講する。この教室は1998(平成10)年に「道の駅あおがき」(兵庫県丹波市青垣町西芦田)内に開設された「丹波布伝承館」の事業として引き継がれ(資料2)、足立は立ち上げ時の3年間講師を務めた。足立逝去後の現在は、彼女に学んだ世代が講師になり、

後継者の育成が続いている。なお、第6期生(2008～2010)の長期講座と2年間の専修生を終えた男性が初めての男性技術者であり、現在は伝承館で指導員を勤めている。

伝承館での「伝承生育成事業」は短期講座(図版1)と長期講座(図版2)の二種類がある。短期講座は全5回の内容で丹波布の基礎的な技術を体験する内容となっているが、長期講座は2年の会期である。したがって、丹波布の技術を身に着け、専業ではないにしても織り続けていく意思と衣食住などの現実的な基盤を持った人が参加してくる。長期講座を修了した伝承生は、丹波市やその周辺で製作を続けているが、実際に全員が織り続けている訳ではないのが実情だ。

また一方で、「丹波布技術保存会」は、伝承館が設立した頃から休止状態に入っていたという²⁰⁾。そこで、技術者達の情報交換や学びのためのコミュニティとして2010年には「丹波布技術保存会技術者協会」²¹⁾が発足した。当会は、「丹波布技術保存会」の下部組織として技術者によって構成され、毎年1回展覧会を開催し現役メンバーによる着尺や帯地などの作品を発表する

他、勉強会なども催し活発な活動が行われている。

3. 丹波布の担い手達

本章では、丹波布の担い手として、復興運動の最初期からの参加者である足立康子と現在の技術者を紹介する。足立は、丹波布伝承館が開館した際に講師を務めたことから、現在の丹波布の技術者達の多くは足立の弟子筋にあたる。したがって、運動の中心人物となった足立の足跡を振り返ると共に、その孫弟子の技術者であるA氏に聞き取り調査を行い、彼女の活動を紹介する。

3-1. 丹波布の担い手から指導者へ—足立康子の事例から

足立康子は1925(大正14)年に兵庫県高砂市に生まれた。1950(昭和25)年に佐治に嫁ぎ、足立家の蔵に保管されていた天保6(1835)年と記載された縞帳と出会った。この縞帳に惹かれたことが、足立が丹波布に携わるきっかけだった(吉田 2012)。同じ頃、上村六郎により丹波

丹波布短期教室開催

自然から作り上げる丹波布に触れてみませんか

～ 初心者の方も歓迎です ～

糸づくりの基礎から織りまで・・・

綿打ちした綿で、じんき(綿の繊維を棒状に巻いたもの)を作り、糸車をつむぎます。

たて糸巻きをして、せいじ整経、ちぎり巻き、を終えたら横に載せ、あじ綜統通し、あじ炭通しの後、はた機織り作業に入ります。

その一貫した手作業の技術講習を行います。



～ 期 間 ～

| 回 | 日 程 | 内 容 (予定) | 時 間 |
|---|-----------|-------------------|-----------|
| 1 | 9月11日(木) | 開講式・糸紡ぎ・整経 | 10時～16時まで |
| 2 | 9月12日(金) | 糸つむぎ・ちぎり巻き | 10時～16時まで |
| 3 | 9月13日(土) | 糸つむぎ・綜統通し・炭通し・機織り | 10時～16時まで |
| 4 | 9月14日(日) | 糸つむぎ・機織り | 10時～16時まで |
| 5 | 9月15日(月祝) | 糸つむぎ・機織り・閉講式 | 10時～16時まで |

- 申込期限 8月1日(金)～8月31日(日)まで
- 定 員 10名(先着順)定員になり次第締切り
- 会 場 丹波布伝承館(丹波市青垣町西芦田541-1道の駅あおがき内)
- 参加費 15,000円(5日間分・初日にお支払いいただきます。)
- 持参品 糸きりハサミ・筆記用具
- 申込み・お問い合わせ 丹波布伝承館(0795-80-5100)
10:00～17:00(火曜休館)

主 催：丹波市立丹波布伝承館

図版1 「令和7年度「丹波布短期教室」受講生募集」チラシ(丹波市ウェブサイトより)

第14期 青垣の里に育ちし丹波布 この縞模様誰に伝えん

丹波布伝承館 長期教室伝習生募集中！

国の選択無形文化財であり、丹波市の伝統文化である「丹波布」— この伝統の技術「紡ぐ」「染める」「織る」の全作業工程を習得し、文化の保存・振興を担う人材を養成するため長期教室伝習生を募集します。

- 講座内容** 糸紡ぎ、草木染色、機織りなどの一連の工程を基礎から指導します。実技指導を受け、定められた課題を仕上げてください。棉や藍など栽培の実器、染料になる草木の採取もあります。
- 受講期間** 令和6年4月～令和8年3月末まで（1年目：基礎コース 2年目：伝承コース）※2年1期の長期教室です。修了者は丹波布技術者として認定されます。
- 講習日** 週4日（火・土日祝日を除く）
- 講習時間** 午前10時～午後4時まで（屋外作業等で随時変更の場合あり）上記日数、随時制内で受講いただけますが、最低必要受講時間1週間に付き20時間以上とします。
- 受講料** 月額12,000円（毎月前月分払）／材料費等 年額45,000円（毎年度4月払）
- 定員** 8名（一次選考：書類審査、二次選考：面接にて12月下旬までに決定します。）
- 募集基準** (1) 丹波布の技術を後世に伝えていける方 (2) 丹波市に定住を希望し、修了後も丹波布の活動を積極的に行われる方 (3) 集団での技術習得のため、他の受講生と協働して作業に取り組みめる方
- 申込み締切** 令和5年11月17日（金）必着
- 申込み方法** 長期伝習生申込書を下記まで提出してください。（郵送・メール可）
- その他** この講座は職業訓練ではありませんので、修了後の丹波布での生計保障はありません。

お問い合わせ・申込先 〒669-3803 兵庫県丹波市青垣町西芦田541-1 丹波市立丹波布伝承館 TEL・FAX 0795-80-5100（休館日：毎週火曜日） 開館時間：午前10時から午後5時 Email: aogaki-tambanuno@city.tamba.lg.jp



図版2 「丹波布伝承館 第14期長期教室伝習生募集のお知らせ」（丹波市ウェブサイトより）

布の調査が行われており、嫁ぎ先の足立家が復興協会の集会の場所であったことから、織り手として姑の足立たかと共に運動に参加する。

日本工芸館が主催となって毎年開催されていた「全国民芸公募展」には、1960（昭和35）年から定期的に出品し、1963（昭和38）年には大阪民芸協団賞、1964（昭和39）年には伝統技術優秀賞、1973（昭和48）年には最優秀賞を受賞している。これには、「丹波布技術保存会」の名称で出品していたが、実際には保存会唯一の若手であった足立が中心になっていたという（吉田 2012: 118）。

1979年には「丹波布技術保存会」会長に就任し、1998年に「丹波布伝承館」が開館した際には講師として3年間に渡り後継者の育成に取り組んだ。丹波布伝承館を辞した後も丹波布の制作を続け、2014年に逝去した。

現在の丹波布の織り手達は、基本的に足立の弟子の系譜にあたる。こうした流れが生まれたのは、足立が1974（昭和49）年から始まった後継者育成講座の講師を務めたためだった。足立

は、当時のメンバーの中で最も若い織り手であり、なおかつ足立たかや良子と共に当初から生産に携わっていたため技術も身につけていた。したがって、これ以降、織り手としての活動と共に、後継者育成事業での講師役を担っていくことになる。現在の後継者育成の拠点となっている「丹波布伝承館」が出来るまでに行われた「丹波布技術伝承教室」（資料1）では、基本的に地域の女性達に対して働きかけが行われており、実際にこうした講座に参加したのは足立の近隣に住んでいた主婦達だったという。

また、後継者育成事業が始まった背景には、1960年頃から広がりを見せた民芸ブームの影響によって丹波布の認知度は上がったが、依然として継承者は現れず保存会の高齢化が問題視されていた状況があったという（吉田 2012: 118）。

1978年に義母であり共に丹波布を織った足立たかが82歳で亡くなると、足立への期待と責任は益々増し、ほぼ一人で丹波布技術保存会を支えていた（吉田 2012: 120）。こうした状況下において、彼女は織り手として丹波布を織り、同

時に指導者として後継者の育成に取り組んだ。この活動が評価され、1987（昭和62）年には「兵庫ふるさと文化賞」を受け、翌1988（昭和63）年には「文部省地域文化功労者」、1990（平成2）年には「伝統的工芸品産業功労者」など、それぞれ個人名で表彰を受けた。現在の織り手達にとっても足立の存在は大きく、「先生」として慕われている。

足立自身は、当初の丹波布復興および継承活動のなかでは、最も若い織り手として義母らの活動をサポートする立場であった。しかし、次第に保存会の高齢化が進むと共に、足立は丹波布の生産、後継者育成、「丹波布技術保存会」の会長など活動の根幹を一手に担うこととなった。

同時に、先述した通り、「丹波布技術保存会」は伝承館が設立した頃から実質休止状態にあったと言う。かつては、三宅が販路を確保・拡大するなど、制作を支える役割を技術者以外の男性メンバーが担当していた。しかし、足立をはじめとした技術者が主な構成員になり、販売スペースを持つ伝承館という拠点を得たことから、活動内容における製作の比重が大きくなっていく。伝承館での活動が軌道にのり、定期的に技術者が卒業するサイクルが出来上がったことで、丹波布の技術継承は現在まで円滑に行われている。足立にとって、丹波布の技術保存の運動は保存会の会長を務めることだけでなく、技術者として丹波布を織り、後継者を育てることだったのかもしれない。

3-2. 丹波布を織る女性—技術者 A 氏の事例から

ここからは、「丹波布伝承館」を卒業し、現在も技術保持者として丹波布を織るA氏への聞き取り調査の結果を踏まえて、現在の織り手の様子を紹介する。なお、聞き取りは2020（令和2）年から現在まで対面で行っている。

「丹波布伝承館」は開館当時から現在まで、丹波布の継承と普及の拠点的な施設である。丹波

布の「技術者」として認可されるのはこの伝承館の「長期伝習教室」の卒業生のみだ。卒業後はさらに技術を磨くために、「専修コース」も設けられている。現在までで卒業生は約80名にもなり、年齢層は年々上がっていることから60代が中心になっている²²⁾。

伝承館を卒業した技術者達は、原則として「丹波布技術保存会」に所属する。同会は織り手と有志が参加する団体であるが、氏が卒業した当時はほぼ休止状態となっていた。そこで、2010（平成22）年に卒業生達の交流と研鑽の場として、有志により「丹波布技術保存会技術者協会」が発足した。これは、「丹波布技術保存会」の下部組織という位置づけで結成され、メンバーは伝承館を卒業した技術者で構成されている。2025年現在、メンバーは約30名で年齢層は30代～80代と幅広い。この約30名は大半が丹波市内に在住しており、全員が女性である。

A氏は、丹波市内に拠点を構える以前は岡山県で4年半ほど暮らしていた。この頃、氏は染織教室に通っており、ウールを主に扱っていたが木綿に関心を持っていたという。丹波に引っ越したのは2004（平成16）年の4月のことだ。なお、丹波は氏の母方の故郷であったことから、元々縁のある土地だったという。氏はこの時に初めて伝承館の存在を知り、丹波布と出会った。岡山にいた頃から木綿布を織りたいという思いを抱いていたことから、丹波布を織ることにしたという。丹波布と出会った当初は民芸運動についてはあまり意識しておらず、長期講座や技術者として織りを続けていく内にその繋がりを知ったそうだ。

A氏は、「丹波布伝承館」の長期講座を第5期生（2006～2008年）として修了した。第五期生は全員で8名になり、これは人数として多い方だったという。その後、「専修コース」で1年残ってから、伝承館で講師を3年間務めた。専修コースは通常2年間だが、その時は伝承館に講師が不足していた都合で1年間だったという。その後は、

自宅に工房を開設して丹波布の製作に携わっている。丹波布の製作は子育てや家事といった家庭内の仕事と共に行っており、自宅の工房を開放して織物や糸紡ぎの教室も開いている。

A氏は丹波布の製作は専業ではなく、育児・家事・その他の仕事と同列に考えており、日常の中の“やること”のひとつだと言う。それは、かつての丹波布が佐治一帯での農閑期の副業であったことから、様々な日常のサイクルのひとつとして、無理なく継続することを目指しているそうだ。

「丹波布技術者協会」では、事務局の窓口や集会・イベントの企画など中心的な役割を担う一人である。特に勉強会では、技術的な向上を目的としたものばかりではなく、工芸や美術の専門家を招いての講義を行うなど、技術と思想の両面で丹波布への理解が深まることを目指している。また、2018（平成30）年には、氏が中心となり「工芸の店 KABURA」を立ち上げた。氏を含んだ技術者4名で運営され、丹波布の販売を中心にワークショップなども行っている。反物と共に、ポーチや鞆などの小物を取り扱っており、現代の生活で手に取りやすいアイテムが並んでいる。

A氏は製作について、現在の暮らしの中で、丹波布が元々用いられていた布団地はもちろん、着物や帯地は簡単に購入できなくなっているとした上で、丹波布の紹介や普及という側面からも、どうやって現代の暮らしに馴染む品物を作っていくかが重要な課題だと語っていた。布としては美しいものができても、何に加工するかで最終的な出来栄が変わってくることを今後の課題としている。

4. 佐知地域における女性の染織という営み—岡山県倉敷市の事例との比較から

筆者は、かねてより民芸運動と女性の関係について関心を持ってきた。これまでの研究では、運動の普及先と見なされた女性がどのように民

芸運動に関わってきたかを、岡山県倉敷市を事例に聞き取り調査を用いて検証した（小野2012）。本稿で紹介した佐治地域の事例と、岡山県倉敷市の事例では複数の共通点が見られる。したがって、本章では二つの地域の事例を比較することで、佐治地域の特色を検討したい。

4-1. 岡山県倉敷市の事例—倉敷本染手織研究所について—

岡山県倉敷市は、民芸運動同人の外村吉之介²³⁾が戦後移住し、実業家の大原総一郎²⁴⁾と共に運動を推進した地域である。本稿で注目すべき外村の活動は、自宅を開放して設立した「倉敷民藝館附属工芸研究所（現倉敷本染手織研究所、以下は本染手織研究所と表記する）」である。これは、染織の技術と民芸の思想を伝えるために設立され、対象は主に未婚の女性とした。外村自身と妻である清子が講師を務め、期間は一年間と定められた。遠方からの研究生は外村家に住み込み、近隣の研究生は自宅から通った。年齢層は20代が主だった。一年を通して糸紡ぎ、染色、織りなど、染織に関する一通りの技術を学び、併せて柳宗悦の著書をテキストに民芸についての座学も行われた。

本染手織研究所で外村は、こうした染織の技術は、自分や家族の生活を豊かにするためのものとして指導した。例えば、身につけた技術を用いて作家を目指すことや、商品として販売すること等は想定されていなかった。制作の姿勢としても、個性を表現するような態度は固く禁止されていた。外村の方針はあくまでも、家庭の為に製作し、家庭の中で消費する品物および労働であった。これは、女性による染織を、家庭内での無償労働のひとつとして見なしていた、あるいはそのように位置づけようとしていた、外村や当時の民芸運動の認識を反映するものであったと考えられる。また、個性の表出としての製作を禁じた態度からは、職人の「無名性」を評価した柳の思想の影響も窺うことができる。

女性による手工芸とジェンダー論について検討する文化人類学者の中谷による「[どこで][誰の]手による手仕事であるかということが、その仕事の成果に対する評価をも左右することになる」(中谷 2023)という指摘の通り、本来は染織という技術を用いて多様な進路があった。しかし、「女性」の「染織」であることから、外村や民芸運動にとって彼女達の染織という活動は、家庭内の無償労働として認識されたと考えられる。

こうした本染手織研究所の卒業生の女性達に聞き取り調査をした結果、次のことが分かった。

本染手織研究所を卒業した女性達は、その後も多くが染織を続けたそうだが、作家的な活動をすることや、製作品を販売し利益を得ることを主な目的とはしていなかった。とはいえ、出来上がった品物を無償で他者に提供することはなく、展示即売会を開いたり、倉敷民藝館の売店や工芸店などでの販売も行っている。それはあくまでも、利益を得ることが目的ではなく、自身の製品に責任を持ち、意識の上で趣味的な活動と区別するための行為であるという。なお、聞き取りは主に2010年から2012年にかけて行い、年齢層は現在の70代から80代である。したがって、彼女達が本染手織研究所に在籍していたのは、おおむね50～60年前になる。

聞き取り調査の際に印象的だったのは、染織を家庭内での仕事とした外村の指導方針について、反発やネガティブな受け止めは見られなかった点である。一見して、彼女達自身を家庭の枠組みの中に囲い込むかのように思えるが、むしろ彼女達はこうした外村の言葉や思想を、自身の人生観や製作の姿勢のなかに、ポジティブに取り入れていた。本染手織研究所は、外村吉之介・清子の死後は代替わりして現在も継続しているが、外村時代の卒業生達はいずれも「外村の弟子」であることに誇りやアイデンティティを抱いている。こうした卒業生達の中から、家庭の外へ活動を広げ全国各地で個展を行ったり、公募展

に出品し授賞する例もあった。

岡山県倉敷市の事例からは、外村ないし民芸運動からの封建的な意識に基づいた思想を受け止めつつも、それらから得た技術や思想を原動力にして、作家として活躍したり、織りあげた品物を通して店舗や顧客と交流し、社会との繋がりを獲得する女性達の姿を見ることが出来た。さらに、彼女達と民芸運動との関係は非常に良好と言える。作家としての活動は外村の想定外だったと言えるが、それは外村の理念に反抗している訳ではなく、あくまでも結果的に作家化したと整理している。彼女達は民芸の思想を重視し、民芸運動に参加していることにも自覚的である。

4-2. 岡山県倉敷市と青垣町佐治地域との比較

岡山県倉敷市の事例と佐治地域の事例を比較すると、当事者の年齢層が異なることを考慮に加えつつも、両者には多くの共通点と相違点がある。本稿では、次の四点に言及する。

第一に、共通点として、両者ともに当事者が染織に携わっている点である。第二に、共に1年ないし2年間平日の昼間の時間を使って研究所や伝承館で学び技術を身に着ける点も共通している。したがって、この期間は基本的にフルタイムでの勤務などは出来ず、時間的、金銭的なハードルをクリアする必要がある。第三として、両者ともに当事者が女性である点も共通している。本染手織研究所の場合は、入所条件が未婚の女性とされていたため、全員が女性である。一方、佐治地域の場合、伝承教室への参加は性別を問わないが、現在の男性技術者は、第6期生(2008-2010)を卒業した一名のみで、その他のメンバーは女性で構成される。伝承館側から働きかけを行っていない状況下で、男女比は著しく偏っている。

第四として、両者には同じように織り手達や製品に民芸運動が背景として関わってくるが、これには相違点も含まれる。

倉敷の場合、織り手の多くは「外村の弟子」や「本染手織研究所の卒業生」であることを、誇りやアイデンティティのひとつとして自覚している。卒業生達が民芸運動とは関係なく外村を師事していたとしても、外村の思想は柳や民芸の理念に依拠していることから、その影響は否定できない。したがって、織り手側と民芸運動との繋がりは密接である。実際にインタビューを行った卒業生からは、研究所で学んだ日々は、その後の人生観にまで影響を与えるものであったことをポジティブに受け止めている様子が窺えた。彼女達が制作した品物についても、多くの場合は商品説明として外村吉之介や民芸との関わりが付記されている。しかし彼女達が手掛けた品物と民芸運動との関係性を見ると、物そのものがストーリーを有しているのではなく、「民芸運動に影響を受けた人物が織った」という流れで物に対して付加価値とも言うべき関連付けが行われる。

丹波布の場合、状況は真逆である。丹波布そのものが柳の評価をきっかけに復興したことから、織り手側よりも丹波布そのものと民芸運動が強く結びついている。つまり、「民芸運動の評価を受けて戦後復興した布」というストーリーが丹波布には前提として備わっているのである。しかし、織り手側に、運動に参加している意識があるかという点、必ずしもそうではない。伝承館の長期講座に参加する際、参加者は民芸運動の存在を知らない場合も多数あるという。したがって、民芸運動と織り手との距離感は織り手によって異なり、倉敷市の事例と比べると個別に開きがあると言える。とはいえ、織り手達は民芸運動と距離を取っている訳ではなく、丹波布の歴史を紹介する際には、必ず言及されると言っても良い。例えば2024（令和6）年9月27日～29日まで東京都に店舗を持つ和装専門店「銀座もとじ」で行われた、丹波布復興70周年を記念した展示即売会では、解説の中で民芸運動の働きかけや柳の評価が紹介されている²⁵⁾。

倉敷市の事例では、卒業生達の染織という行為は、それぞれに差異はあるが少なからず外村の思想または民芸運動の実践という側面を持っていた。これに対して、丹波市の事例では技術者達には民芸運動の実践者という認識は無かった。むしろ、彼女達の自認は、いずれも一人の織り手であり、丹波布を織る動機はそれぞれ異なるが、最も大きいのはやはり丹波布そのものに対する興味関心である。

丹波布復興運動は、最初期は男性メンバーを中心に始まっていくが、次第に足立康子と彼女の育てた弟子達による活動に主体が移っていく。弟子達は1名を除いて現在までその他全員が女性である。男性が指導者的な立場に就き、女性が織り手として実働面を担う点は倉敷の事例と同じだが、一方で丹波布の場合は男性指導者による思想的な指導や、その影響はほとんど無かったと言える。

先述した通り、復興運動の初期のメンバーは、三宅による日本民芸協団の支部として「丹波協会」の結成に深く関わるなど、積極的に民芸運動に参加していた。そもそも、柳が評価したことをきっかけとして丹波布の復興が始まり、布の名称も柳の名づけをそのまま用いた「丹波布」としたことから、運動の動機は「民芸運動による評価」であったと言える。だからこそ、初期のメンバーが民芸運動に接近しようとするのは当然の流れだった。

しかし、その流れは足立康子に世代交代が行われた時から、徐々に減衰していった。実際、足立から民芸の思想的な指導を受けたという話はほぼ無く、足立自身にも積極的に運動に参加する意思は見られなかったという。A氏の話しからは、足立から連なる現在の技術者達は、民芸運動の評価とは関係なく、よりシンプルに自らの感性に従って物としての丹波布に魅力を感じて、技術を学んでいる様子が窺える。したがって、足立が民芸運動の影響に関わらず丹波布に情熱を傾けた点も、後に続く技術者達が民芸運

動との距離を自由な意志で測り、丹波布に携わることができた理由だと考えられる。

また、山崎によれば、こうした伝統的な手工芸の世界において、染織領域以外で「職人」として名を残した女性はほとんどいないという(山崎 2023: 208-214)。翻ると、伝統的手工芸の領域は男性が主体として携わってきたが、染織の分野に関しては女性も参加していた。

丹波布の事例においても、当初関わっていた男性メンバーは運営側で、現場で実作業を担ってきたのは常に女性だった。また、これまで染織以外の伝統工芸の分野に女性がほぼ存在せず、だからこそ「女職人は現代日本社会で注目されるコンテンツ」²⁶⁾になる状況が、佐治地域の場合は男性技術者が注目される存在となっている。2015(平成27)年4月17日の丹波新聞には、男性技術者へのインタビュー記事が掲載されたが、見出しに「丹波布」指導員で唯一の男性技術者」とあり、男性技術者がいかに希少であるかが読み取れる²⁷⁾。

丹波布の場合、後継者育成事業に性別による制限はしていないにも関わらず、現在まで織り手の男女比は圧倒的に女性に偏っている。

4-3. 現代における女性と染織の向き合い方

倉敷市の事例では、染織の技術自体はあくまでの家庭内の仕事として指導された。一方、佐治地域の場合、伝承館を卒業後は技術者として織り続けていることは期待されるが、そのスタイルが言及される訳ではない。どのような時間や労力をかけて丹波布を織るかは、それぞれの技術者に任される。

今回インタビューをした技術者の周辺では、丹波布の生産を仕事にして経済的に自立することより、いかに継続して織り続けていくかが重視されていた。年齢層は40代かそれ以上で、いずれも結婚し子育てや親の介護をしている世代だ。A氏によれば、生活のサイクルの一部に組み込むことで、他の様々な家事労働

や育児等とのバランスを取りながら、無理なく継続することを念頭に置いているという。

哲学の視点から民芸運動について分析する鞍田は民芸運動をめぐる近年の評価には、ライフスタイルの変化が関係していると分析する。鞍田によれば、高度経済成長期やバブル期の経済的な視点や消費社会とは異なる評価軸で、自身の生活を振り返る動きが出てきた(鞍田 2015)。2000年代の初めから出版された『ku:nel』²⁸⁾や『天然生活』²⁹⁾といった、暮らしをテーマにする雑誌を通して「スローライフ」や「ロハス」、「丁寧な暮らし」などのキーワードが紹介された。また、こうした雑誌の発刊から暫くして、民芸運動に対してもライフスタイルの視点から注目が集まった。2011年にパナソニック電工汐留ミュージアムで「濱田庄司スタイル—理想の暮らしを求めて—」として、陶芸家濱田庄司の衣食住をテーマに展覧会が行われた。ここでは、濱田庄司の陶芸作品だけではなく、身の回りの道具や服を展示し、彼のライフスタイルが紹介された。2023年からは「民藝MINGEI—美は暮らしのなかにある—」と題した展覧会が、大阪・中之島美術館を皮切りに全国を巡回した。タイトルの通り、民芸運動をライフスタイルの視点から分析したもので、民芸運動に関連した品物を用いてモデルルームの展示も行われた。これらの展覧会を通して紹介されたのは、柳ら民芸運動の同人達が自身の眼によって物を選び、それを生活の中に取り入れることによって、それぞれが心地よい生活を作り上げていった様子である。

自身の生活に主体を置いた丹波布の技術者達の織物に対する向き合い方は、現代のこうした潮流と呼応している。つまり、自身がより良い生活や人生を営むために、自分自身で取捨選択をするという意味において、一つの要素として丹波布の製作が選択されている。そして、それぞれの生活のなかに染織という活動を吸収し、無理なく継続可能なサイクルを構築している。

これは例えば、2007（平成19）年から策定された「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」などのように、仕事や趣味など生活の中の諸活動のどれかに偏るのではなく、理想の暮らし方やそのバランスを求める、現代的な取り組みの姿勢でもあると考えられる。

しかし一方で、その取り組み方は、丹波布を織りたいという女性達の思いに支えられている部分もあるだろう。丹波布の価格は、実際の労力に釣り合うとは言い難く、技術者達が本当に希望するスタイルで製作に取り組んでいるかは定かではない。山崎は、男性主体の工芸の業界へ参入する女性の言説について、紡ぐ、織る、縫うなどの繊維労働においては女性の作り手が多く存在していたが、こうした労働は家庭内労働の一環と見なされたり、労働対価も男性より少ないなど正当に評価されてこなかった（山崎 2023: 221）としたうえで、工芸の業界への「女性の参入を賛美し、こうした手工芸のジェンダー構造の解体を意図しているように見えつつ、手工芸全を女性化—フェミニナイズ—しているのだと言えよう。女性化は価値の引き下げを呼び、そこへ参入する者は主体的にその価値を受け入れざるを得ない」（山崎 2023: 221）と指摘している。

丹波布に対してもこうした視点と認識は存在しており、対価や働き方、あるいは担い手に対するバイアスが生じている。特に技術者の男女比が圧倒的に女性に偏っている点からも、丹波布の現場もまたフェミニナイズの渦中に存在していると言える。技術者達は継続可能な取り組み方をそれぞれの生活に合わせて考えて実践しているが、一方で、その自由度は、女性領域として認知されるが故に発生する制限下に依然として置かれているとも言えよう。

おわりに

丹波布は1993（平成5）年に、兵庫県伝統的工芸品に指定されたことから、兵庫県の伝統的な

産品として認知されている。また、行政もそうした文脈で丹波布のPRを行っている。しかし、本稿で述べたように、「丹波布」自体は、地域に元々あったものではなく、民芸運動という外部からの働きかけを受けて成立した。つまり、柳らが佐治地域の数ある木綿布の中から自らの審美眼によって品物を選別し、その選んだ物に対して「丹波布」という新しい名称と枠組みを与えたと考えるべきである。

本稿では、丹波布が成立し地域を挙げて復興と継承に至るまでの経緯を、聞き取り取材の結果を交えて整理した。これを通して、地域の有力者や知識人と上村六郎が主体となって活動を始めたことが分かった。柳の関与は最初期の論考の発表が主であり、地域に対して具体的に働きかけを行った様子はない。

1954年の復興当初、保存会は指導者的立場の男性が主体となって運営し、実作業は女性が担っていた。最初期は、足立康子の義母である足立たかや、その世代を中心に製作を行ったが、次第に康子が保存会の活動と実作業の両面を支え、これによって運動の構成員が徐々に変化していく。特に、康子が実技の指導者として立場を確立していく過程の背景には、地域の女性同士のつながりがあった。地域の女性達が丹波布の生産に加わるようになるのは、1974年に後継者養成講座が開講してからだ。講師を務めた康子は、周囲から本格的に指導者として認知され、丹波布の後継者育成と継承運動を支えていった。

当初は男性が運営を、女性が製作を担っていた復興運動だが、丹波布を取り巻く状況は、康子が中心となって活動し始める頃から男性から女性へ、運営から製作者へとその主体が変移していった。現在まで男性の技術者が一人しかいない点からも、女性中心の状況をうかがうことができる。

本研究では、現在の技術者の状況や女性による染織の意義を分析するため、聞き取り調査を行った。山崎は、現在の伝統的な手工芸が危機

に瀕しているとしてその背景に、「需要が落ち込んでいる手仕事であること、「古臭い」規範や関係性だけではなく、作ればもれなく「伝統」の重荷がのしかかること。そして稼げない」ことを挙げている（山崎 2023: 206）。加えて、丹波布の場合は、ここに民芸運動の関与が加わってくる。つまり、技術者達は伝統的手工芸の担い手であるだけでなく、民芸運動の担い手としても期待され、あるいはそのように見なされてきたと言える。

他の手工芸の分野でも発生する負荷と共に、民芸運動の文脈も生じる丹波布だが、技術者達の多くは丹波布そのものに惹かれて伝承教室に参加していたことが分かった。A氏によれば、現在の織り手達は、「民芸運動が評価したから優れている」、あるいは「民芸運動が評価をしたから興味を持った（織りたいと思った）」等の目線で丹波布を見ている場合は無く、普段でもさほど気にすることが無いようだ。むしろ、氏も含めて重視しているのは、「良い丹波布を織ること」であるという。それは、例えば美しさや使いやすさ、丈夫さなどを全て含んでの「良い」という表現である。また、ここで言う美しさの手本となるのは柳の蒐集した丹波布である。丹波布の織り手達は、民芸の思想や柳の言葉よりも、柳が見出した丹波布の美しさに共感を示している。

さらに、丹波布をPRする際には、必ず柳の言葉と民芸運動が関わった背景が語られる。先述の通り、2018年から東京の銀座もとじで定期的に丹波布の展示即売会が開催されてきた。こうした時に、柳による「丹波布の美」は必ず引用される。濱田は大分県小島田焼の産地が民芸運動との接触を経て、伝統的な民窯の産地というイメージを当事者が自己のものとする際に、「民芸派の固定化された語りをそのまま受け入れているようでありながら、そこには巧みに「自分らしさ」が付与され、窯元らのアイデンティティとなっている」（濱田 2006: 154）と指摘している。丹波布の産地の場合も、民芸運動との関係を丹波布の

物語として活用しているが、一方でその距離感により個人の判断に任されている部分が多い。

倉敷市の事例と比較しても、丹波布自体は民芸運動の背景を持ちつつも、技術者達は民芸運動へのコミットの度合いは低く、民芸運動の担い手という意識もほとんどないと言えよう。むしろ、民芸運動との距離感は、技術者が主導権を持ってコントロールしている。

今日、技術者達の活動は、伝統的な手工芸の継承として、社会的にも文化的にも大きな意義を持っている。丹波布の技術者達が行うような、全工程が手作業の染織や、手織りによる品物はそもそも現代生活の中で必須ではない。だが、基本の技術や道具が地域に残存していたことは、丹波布の復興運動初期に大きなアドバンテージとなった。また、民芸運動がライフスタイルの文脈からスポットが当たっているように、丹波布をはじめとした手工芸品は一定の人気を持って消費されている。

しかし、丹波布の価格は実際の労力に釣り合っているとは言い難く、その取り組み方も自由に選択できるものではない。また、染織技法は数ある手工芸の分野の一つの技術であり、技術の生かし方は商品の製作や自己表現など、本来であれば多岐にわたる。染織の技法を身につけるだけであれば「丹波布伝承館」である必要はなく、絹糸との交織をする丹波布は、本来基本の技術を身につけた上でさらに選択されるものである。現在の技術者達は、伝統工芸や民芸運動の担い手である等の外部からの期待や価値付け、価格設定をはじめとした伝統的手工芸をめぐる諸問題を踏まえた上で、自分達の選択と判断で丹波布の製作に取り組んでいる。

特に制作のスタイルは、技術者自身がそれぞれの判断で継続可能なサイクルを作っている。それは一見して、現在の「丁寧な暮らし」や「スローライフ」、「ワーク・ライフ・バランス」的な志向のようであり、こうした流れともマッチしている。しかし、このようなスタイルが選択

された背景には、手工芸を取り巻く困難な状況があるからだろう。現状、丹波布の売り上げでは経済的に自立することは難しく、また技術の習得のために「丹波布伝承館」に数年間通わなければならない。当然、通っている間はフルタイムで仕事をするのは出来ず、その期間を丹波市佐治地域で過ごすための生活基盤が必要となる。技術者達はいずれも、家庭の中で育児や家事、介護などを主体として担っている。現在の丹波布の取り組み方は、復興を果たした丹波布を途絶えることなく織り続けていくことへの思いと、技術の向上といった目標を踏まえた上で、それらとの折り合いのなかで女性達が編み出した方針であると考えられる。

本稿では、技術者に対しては一名のみの調査であったことから、引き続き佐治地域で複数の織り手への聞き取り調査を行い、より詳細に状況を分析する必要がある。民俗学における女性と、女性が行う染織の社会的な位置づけや意義についても検討を続け、研究分野に資したいと考える。また、丹波布はイギリスのヴィクトリア・アンド・アルバート美術館に収蔵が確認されている。民芸運動の最初期からの同人であり、陶芸家バーナード・リーチが関わっているものと考えられるが、丹波布が海を渡った経緯についても今後調査を行うこととする。

《資料1：1984年「丹波布技術伝承教室」》

1. 事業：丹波布後継者養成事業（伝承教室）
2. 趣旨：失われていく丹波布の手作りの良さを認識し、民俗文化財に対する高揚と愛護を目的として啓発活動を行い、伝承教室を開設し、後継者の育成を図る。
3. 開設期間：昭和59（1984）年7月29日～同年12月2日
※7月～11月までの講座は糸紡ぎ・機織りの講座、12月2日は染色の講座とされた。

4. 開設場所：町民センター
5. 学習時間：40時間（全10回）
13：00～17：00
6. 学習内容：講義・実習（糸くり・染色・機織り）
7. 参加対象：町内に居住する婦人20名以内
8. 費用：無料
9. 講師：青垣町丹波布保存会会長：足立康子
青垣町文化協会会長：中尾巖
青垣町丹波布保存会会員

《資料2：2022年「第13期丹波布伝承館長期伝承生募集」》

1. 講座内容：糸紡ぎ、草木染色、機織りなどの一連の工程を基礎から指導する。綿や藍などの栽培の実習、染料になる草木の採取も行う。
2. 受講期間：令和4年4月～令和6年3月末まで。
※1年目基礎コース、2年目伝承コースとして2年1期の長期教室であり、修了後は丹波布技術者として認定される。
3. 講習時間：10：00～16：00
4. 受講料：月額12,000円、
材料費等年間40,000円
5. 定員：8名
6. 募集基準：①丹波布の技術を後世に伝えていける方
②丹波市に定住を希望し、修了後も丹波布の活動を積極的に行える方
③集団での技術習得のため、他の受講生と協調して作業に取り組める方

参考文献

- 池田 忍
2019 『手仕事の帝国日本一民芸・手芸・農民美術の時代一』岩波書店。
- 上村六郎
1931 「丹波布のあとを尋ねて」『工藝』6:

- 1-41。
- 1964 『丹波布縞帳』 京都書院。
- 小野絢子
2012 「民芸運動の中の女性」『文化/批評』 4: 115-129。
2025 「大阪の民芸運動—三宅忠一の眼—」『陶説』 861: 34-40。
- 小島邦江
2005 「柳宗悦と倉敷—大原孫三郎との出会いを中心に—」熊倉功夫・吉田憲司『柳宗悦と民芸運動』 322-347、思文閣出版。
- 金子貫道
1958 「丹波布の復興」『民藝』 67: 14-16。
- 熊倉功夫
1978 『民藝の発見』 角川書店。
- 熊倉功夫・吉田憲司共編
2005 『柳宗悦と民芸運動』 思文閣出版。
- 倉石あつ子
1995 『柳田国男と女性観』 三一書房。
2009 『女性民俗誌論』 岩田書院。
- 鞍田 崇
2015 『民藝のインティマシー—「いとおしさ」をデザインする』 丸善株式会社。
- 曾和英子
2018 「丹波布技術伝承における地域資源活用」『Bulletin of Asian Design Culture Society』 12: 1377-1386。
- 滝川秀行
2017 『丹波布復興の父 金子貫道』 神戸新聞総合出版センター。
- 趙 英玉 (曾和英子)
2018 「丹波布の美学及びその技術伝承」『社藝堂』 5: 57-72。
- 中谷文美
2023 「手仕事とジェンダー—「女の手」が意味するもの」『/art』 39: 36-47。
- 濱田琢司
2006 『民芸運動と地域文化—民陶産地の文化地理学』 思文閣出版。
2024 「地元有力者」とローカルな文化振興・文化運動：ヤハギ川観光協会から名古屋民芸協会の本多静雄」『関西学院史学』 47: 51-68。
- 山崎明子
2005 『近代日本の「手芸」とジェンダー』 世織書房。
2023 『「ものづくり」のジェンダーロール』 人文書院。
- 三宅忠一
1956 「丹波布の近況」『日本の工芸』 13: 3。
1957 「兵庫の民芸 丹波布の復興」『民藝』 53: 6-7。
1960 「よもやま通信」『日本の工芸』 59: 2。
1961 「金子貫道氏丹波布技術保存協会を脱会する」『日本の工芸』 71: 4。
- 八木 透
2007 「民俗学におけるジェンダー研究と近代家族」『文学部論集』（佛教大学） 91: 73-84。
- 柳 宗悦
2011 (1931) 「丹波布の美」『柳宗悦コレクション2 もの』 212-126。
2014 (1956) 「京都の朝市」『蒐集物語』 中央公論新書。
- 吉田ふみゑ
2012 『丹波布に魅せられた人』 北星社。

注

- 1) 1926 (大正15) 年に柳を中心に始まった文化運動。美的な価値を認められていなかった日本各地の手工芸品に美を見出し、それを「民藝 (民衆の工藝)」と呼んで評価・蒐集した。その活動は多岐にわたり、蒐集品を展示するための施設を建設する他、産地の支援や、見立てにより新しい用途を提案し、当時の生活の中でも使用可能な商品として百貨店で販売するなどを行った。
- 2) 1939年8月発行の『月刊民藝』に座談会録「民藝を語る」が掲載された。参加者はいずれも民芸運動の最初期からの同人である寿岳文章 (1900-1992)、寿岳の妻であり英文学者の寿岳しづ (1901-1981)、精神科医の式場隆三郎 (1898-1965) の3名。前半では寿岳による和紙の研究が紹介され、後半からは「婦人と民芸運動」、「女の人に民藝を理解させたい」として女性に対していかに民芸運動を展開するかが議論された。
- 3) 2017年発行、丹波布復興60周年記念事業実行委員会が作成した冊子。
- 4) 丹波布の茶色系統の染料のうち、最も貴重なものは榛の木の皮である。佐治地域では、この榛の木の皮は、高下駄の歯を作る時に出る廃材を利用していった。雪深い地域であることから高下駄を履いていた (吉田 2012: 93)。
- 5) 上村六郎 (1894-1991) 染織研究家。新潟県に生まれ、京都高等工芸学校 (現在の京都芸術高等学校) にて染織を学ぶ。武庫川女子大学、大

阪学芸大学で教授を歴任する。

- 6) 柳宗悦による『蒐集物語』(初版1956年)の「京都の朝市」に、丹波布と出会った時のエピソードが登場する。市の主人が「丹波」と呼んだことから仮に「丹波布」と呼称することが語られている。
- 7) 青田は丹波布の復興運動に直接的に関わることはなかったが、これを通して植物染料への関心を深め、大阪日本民芸館には青田が試作した丹波布が収蔵されている。
- 8) 『工藝』6号(1931年、聚楽社による発行)では丹波布の特集が組まれた。本書は柳が初めて丹波布について言及したものである。
- 9) 三宅忠一(1900-1980)実業家。民芸運動の初期の同人の一人だが、意見の対立がもとで1959(昭和34)年に柳のもとを離れる、
- 10) 林弥衛(生没年不詳)やまと民藝店店主。京都河原町に現在もあるやまと民藝店の店主。1946(昭和21)年から創業、京都の民芸店の草分け的存在と言える。
- 11) 篠田統(1899-1978)当時大阪学芸大学にて教鞭を執っていた。八木によれば、染色に関する実験に協力していたことから、佐治訪問に同行したとのこと。
- 12) 芦田良子(生没年不詳)、旧姓足立。足立たかの実の娘にあたり、たかの実家である芦田家に養子に入った。丹波布の復興運動が始まると、たか、康子と共に織り手として関わった。
- 13) 1955(昭和30)年2月28日～8月4日まで開催された。
- 14) 日本工芸館の機関紙として1955(昭和30)年から創刊した。昭和39(1964)年1月に発行した100号を機に、誌名を『日本の民藝』に変更した。2012年に終刊した。
- 15) 1971(昭和46)年には、当時の文化庁長官であった今日出海より、丹波布技術保存会宛に「選択書」が交付された。この「選択書」の原本は足立康子宅に保管され、複製を丹波布伝承館が所有している。
- 16) 『丹波布に魅せられたひと』(吉田2012)では、章のタイトルとして「無形文化財「丹波布」を守る」とあるように、度々無形文化財として表記される。これが吉田の認識に基づいた語りである可能性もあるが、一方でこうした認識は詳細を改めないまま緩やかに共有されていると考えられる。
- 17) 三宅は民芸品の無名性や量産性、廉価性などを重視し、庶民の生活を救済するものと捉えて

いた。したがって、濱田庄司や河井寛次郎をはじめとした、民芸運動に作家が参加していることや、民芸品そのものが高額化することに疑義を呈した。(小野2025:34-40)

- 18) 1934年に民芸運動の活動拠点として柳宗悦を初代会長として設立された。
- 19) 会長に安田尚熙、常任理事に白井芳郎、市野伊作、理事に田村徳治、金子貫道、蘆田健蔵、中沢正、足立清太郎、足立たか、清水貞芳、松本敬治、大上亨、生田和孝が就任した。顧問には上村六郎が就いた。(三宅1960)
- 20) 2025年8月、A氏からの聞き取りによる。
- 21) 2025年6月から「丹波布技術者協会」に名称を変更し、別団体となる。
- 22) 2025年時点で卒業しているのは、第13期生までである。第14期生が2024(令和6)年4月～2026(令和8)年3月末までの期間で始まっている。
- 23) 外村吉之介(1898-1993)染織家。倉敷民藝館初代館長。戦後、柳の薦めで岡山県倉敷市に移住し、同県の民芸運動を推進した。倉敷民藝館附属工藝研究所(現倉敷本染手織会)を自宅を開放して設立し、妻である外村清子と共に地域の女性達に染織の技術と民芸の思想を伝える活動を行った。
- 24) 大原総一郎(1909-1968)実業家。倉敷絹織(現クラレ)に入社し、社長に就任する。父である孫三郎の代から民芸運動を支援する。岡山県下における民芸運動を推進した。
- 25) 銀座もとじ「丹波布 復興70周年記念展」ウェブサイト(<https://www.motoji.co.jp/blogs/events/tanbanuno202409>)参照(2025-08-10)
- 26) 同掲書参照。
- 27) 丹波新聞2015年4月17日「「丹波布」指導員で唯一の男性技術者 廣内 良さん(丹波市)」
- 28) 2003年よりマガジンハウスから創刊した隔月刊誌。「クウネル」は食べることと寝ることを意味し、心地よい暮らしの紹介をテーマにした雑誌。『天然生活』などと併せて、暮らし系と言われるジャンルの雑誌。
- 29) 2003年から別冊として始まり、翌2004年から定期刊行が始まる。表紙のタイトルには「小さなこだわり 小さな暮らし」というキャッチコピーがつき、「ていねいな暮らし」をテーマにしている。

2025年8月31日 受付

2025年11月17日 採択決定



写真1 丹波布 横 40cm 江戸時代末期 大阪日本民芸館蔵



写真3 丹波布（広巾）横 56cm 制作年不詳 日本工芸館蔵



写真2 丹波布（広巾）横 54.5cm 制作年不詳 日本工芸館蔵